

オーストロネシア語圏の 言語文化

その1 イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

——ポリネシアの書記言語（本稿）

その2 オーストロネシア語圏の神話（次稿）

その3 日本語の起源（次々稿）

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo —— ポリネシアの書記言語

河崎 靖

1.

伝統的に、日本語をオーストロネシア語系とアルタイ諸語との混合言語だとみなす説を有力だとする考え方がある¹。日本語は確かに、オーストロネシア語系の言語と文法・形態は異なるが、音体系が似ており、基礎語彙についても類似性が指摘されるという考えである²。すなわち、オーストロネシア語族が日本祖語を形成した言語の1つであったとする見方である³。学界の通説として、オーストロネシア語族の源境が中国南部付近にあり、台湾を經由して東南アジア島嶼部からオセアニアへ拡散したとみなされているが⁴、近年、人類学の領域でも遺伝子情報に基づく研究が盛んになり、縄文人や弥生人を中心とする古人骨の遺伝子研究が進むにつれ、日本人の遺伝的多様性が明らかになりつつある⁵。

ただ、この研究成果から判明するのは、縄文時代より日本列島には多様な遺伝的特徴をもった人々が暮らしており、日本人の起源論が明らかにされるというよりは⁶、むしろ、日本人の母胎となった人々の起源地が1つではなかったということである⁷。このように、オーストロネシア語族と日本語との関係については、今のところ、日本語の底層言語としてあるいは混合言語として関与したとみなすのはなお仮説の段階であり、未だ確定的なことは言えない状況である。

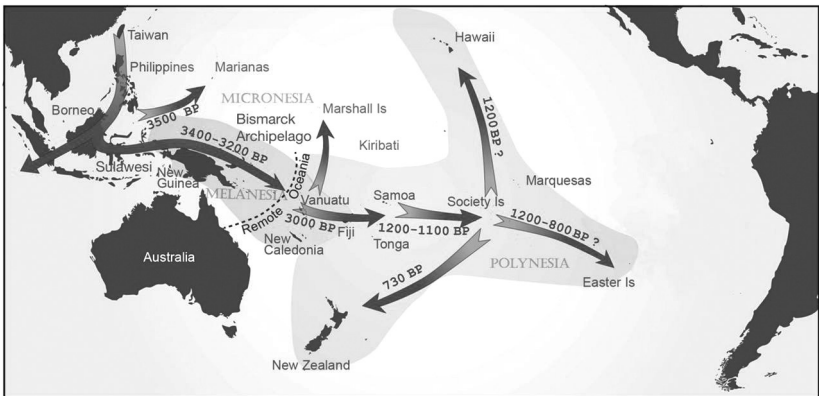
そもそも、日本列島の歴史を考察するにも、農民・漁民ではない、漂海民のような人々の存在を想定することで解明できる諸課題も少なくないように思わ

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

れる。倭人も、オセアニアのポリネシア人のように、海上活動に長けた、外交的な農耕・漁労民であったと考えられ、事実、年齢階梯制・二重王権⁸など共通する文化的な側面がある。東南アジアの漂海民と類似した生活形態をもった人々が九州や瀬戸内を本拠として活動していた可能性も十分にある。このような民の集団の中から、古代の海人族が生まれたのであろう⁹。

2.

ポリネシア人の先祖がミクロネシアあるいはメラネシアを経て、ポリネシア各地への移住の中心地であったと考えられるソサイエティ諸島へ到来したことをポリネシア文化誌の前半と捉え¹⁰、以降、マルケサスへ、ハワイへ、またはニュージーランドへと移住していく過程を、その文化誌の後半とみなすことが一般的と見ていいであろう¹¹。



オーストロネシア語族¹²

オーストロネシア語族とは、台湾の高山族諸語に端を発して¹³、アメリカ合衆国のハワイ語から、ニュージーランドのマオリ語まで広い地域に行われる諸言語の系統的総称のことである。西はアフリカ大陸南東洋上のマダガスカル

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

島¹⁴のマラガシー語から、東はチリ領であるイースター島のラバヌイ語までが含まれる。古くはマライ・ポリネシア語族（南島語族）とも言われていたこともあり、その総数は約 1000 に達する¹⁵。

このオーストロネシア語族は、さらに語派に分けられ、

- (1) ヘスペロネシア語派：マラガシー語・マレー語・ジャワ語・タガログ語・セブ語・ミクロネシアのチャモロ語・パラウ語など¹⁶
- (2) メラネシア語派：インドネシア東部のビアク語・ビスマーク諸島からニュー・ヘブリデス諸島、ニュー・カレドニアの諸言語・フィジー語・ミクロネシアの諸言語など
- (3) ポリネシア語派：ハワイ語・ラバヌイ語・マオリ語を頂点としてその大三角形に取り囲まれた地域内の東部諸語。サモア語、ミクロネシアのカピンガマランギ語・ヌクオロ語などのサモイック外郭諸語、トンガ語を含むトンギック諸語など

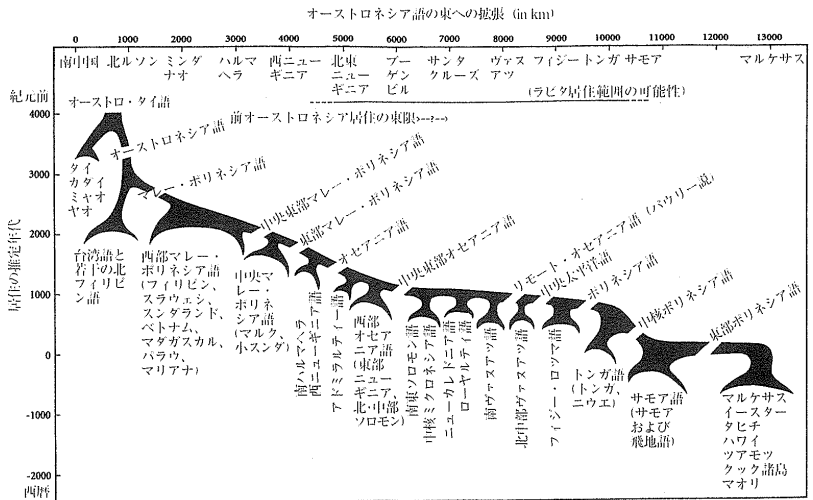
と伝統的に分類分けされてきた。このグループの言語的特徴として、(1) は原オーストロネシア語の祖語音と祖語を最もよく保持するが、(2)・(3) となるにしたがい祖語音の数は減少し、祖語形は開音節化する傾向が著しいという点が挙げられる。以下は、身体語彙の一部であるが、いずれも 1 つの祖語形から派生した語形である。

	耳	胸・乳	へそ
マラガシー語	Tadiny	hóho	fôitra
タガログ語	Tainga	suso	pusod
ブスン語	Tangiya	suso	pusoh
フィジー語	Daliga	sucu	vicovico
ラバヌイ語	Taringa	u'u	pito

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

文法的には、(1) は接辞（接頭辞・接中辞・接尾辞）を盛んに活用して派生語を生み出すが、(2)・(3) となるにつれて接辞の使用は低下し、その痕跡が残るのみである¹⁸。(1) には一般的に前鼻音化現象が見られ、接頭辞と語根との間に連結のための鼻音が挿入される。タガログ語の例を示せば、ma-takot「恐れる」（語根 takot）に対し、鼻音形は ma-nakot「脅かす」となり、文法的機能の違いが発生している。また、接中辞 -in- を用いて t-in-akot「脅かされた（完了）」のように受動形が形成される。語順は、(1)・(2) では主語—述語—目的語（SVO）が一般的であるが、(3) では述語—主語—目的語 VSO（または述語—目的語—主語 VOS）が原則となる¹⁹。語彙面では、フィリピンとインドネシアにまたがる(1) は、紀元前後からインド文化の影響を強く受け、サンクリットからの借用語が多く見出される。

これら諸言語の系統的關係を重視し、時間軸に沿って言語が分岐していくプロセスを視覚的に見て取れるようにしたのが次の図表である²⁰。

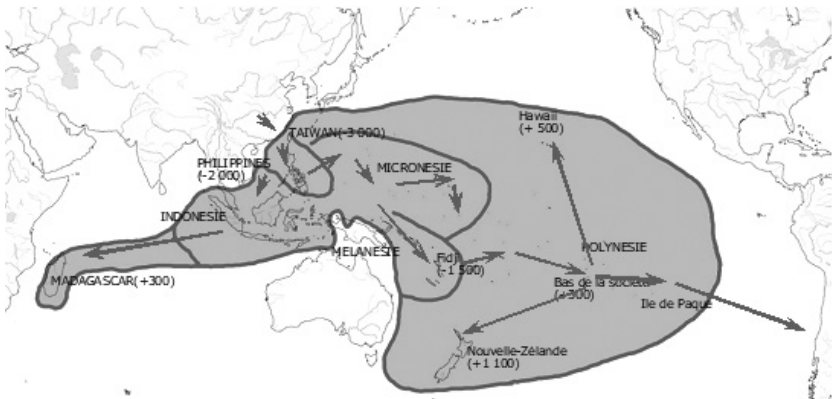


(ベルウッド1989)

3.

オセアニア（その面積のほとんどが海）の人々は、西洋世界と出会う遙か前から高度な航海技術をはじめとした彼らならではの独自の文化を育てていた。およそ紀元前 1200 年頃に東南アジアから東へ向かって船出し、ハワイ・イースター島・ニュージーランドをはじめオセアニア全域²¹に広がって行った²²。多くの人々にとって、海は魚や貝などを獲る日常的な場であると同時に、遠く離れた島と島をつなぐ道でもあり、人と人を結び付ける紐帯ちゆうたいともなっている²³。

ニュージーランド²⁴北島の西北部レインガ岬（Cape Reinga）は、先住民マオリの神話と結びついた聖地であり、この岬から死者の魂は巨木を伝って地下の冥界に入り、安息の故郷ハワイキに帰ると信じられている。神々の住んでいたハワイキでは、原初、密着していた、父なる天と母なる大地を、息子の一人タネがこじ開け明るい世界ができあがった。タネは初めて人間の女を作り、彼女が産んだ娘ヒネとも夫婦になる。これを恥じたヒネは冥界への道を作って冥界の女王になる。こうして、この世とあの世が生まれた。こうしたハワイキ神話の大筋はポリネシア一体に共通している。



オーストロネシア語族の大移動²⁵

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

オーストラリアの先住民を表わす「アボリジニ」²⁶という用語は、もともとラテン語の「最初から」(aborigine)を意味する ab「～から」+ origine「起源」に由来している²⁷。オーストラリア大陸が地形的に現在のようになって以後、ヨーロッパ人が到来するまで、オーストラリアは外の世界から、言わば隔絶された場所であった²⁸。アボリジニが残した壁画にはインドネシア方面の特徴を有する帆船が描かれており、オーストロネシア系の文化²⁹と交流があったことが示唆されている³⁰。

そもそも、原初の先住民（アボリジニの祖先）がどこから来たのか、この点を確定することは学術的に難しい³¹。純粋に言語の問題に限定して、これまで印欧語学で営々と培われてきた比較言語学の手法を用いるにしても、時間のスパンが違いすぎ、そもそも、この印欧語の方法論が適用可能なのか疑問を呈さざるを得ない。すなわち、印欧語族に属する諸言語はせいぜい数千年の歴史しかないのに対し³²、ずっと長い歴史（万単位の年月）が想定されるオーストラリア原住民の言語に比較言語学のアプローチがどこまで有効なのかは定かではない³³。言語を超え広く民族移動という観点から見れば、オーストラリアの原住民のルーツは、約5万年前の更新世末期に陸続きだったニューギニアを通り、アジア大陸から移動した人々ということになろう³⁴。海面の上昇により、オーストラリアおよびニューギニアが分離した後も、人々の移動³⁵は続き、現在のパプア人（ニューギニアのパプア諸語を話す人たち）が形成されるのである³⁶。こうして、オーストラリア（アボリジニ）とニューギニア（パプア人）の人々がオセアニアの最も古い先住民とみなされることになる³⁷。ただし、オーストラリア諸語とパプア諸語との系統関係はもはや明らかではない³⁸。

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

を知らなければならない。すなわち、紀元前 1500 年頃、西北メラネシアから、ラピタ文化⁴⁵（ラピタ人：原オセアニア語を話す原オセアニア人のこと）で有名な海洋的な言語集団が東の方向へと大移動を始めたのである⁴⁶。オーストロネシア語⁴⁷のもともとの原郷は中国南部が想定され⁴⁸、オセアニアへは東南アジア島嶼部（フィリピン・インドネシア）から入ったのであろう。こうして、東南アジアからオセアニアにかけて⁴⁹、オーストロネシア語族の大きな連続的な分布地域が生まれることになった⁵⁰。

オーストロネシア語族は、実に東はイースター島から西はアフリカ大陸の東のマダガスカルに至るまでの広大な領域という、印欧語族に次ぐ 2 番目の大きさである。人類は東南アジアからオセアニアに何回も波となって渡り広がっていったという経緯があり、オセアニアは東南アジアの延長という側面も確かにある。自然人類学的には、東南アジアの人も、ミクロネシア・ポリネシア⁵¹の人たちもモンゴロイドであることは一般に認められているが⁵²、さらにメラネシア⁵³・ニューギニア・アボリジニの住人もモンゴロイドの中に入るという説も提唱されている⁵⁴。

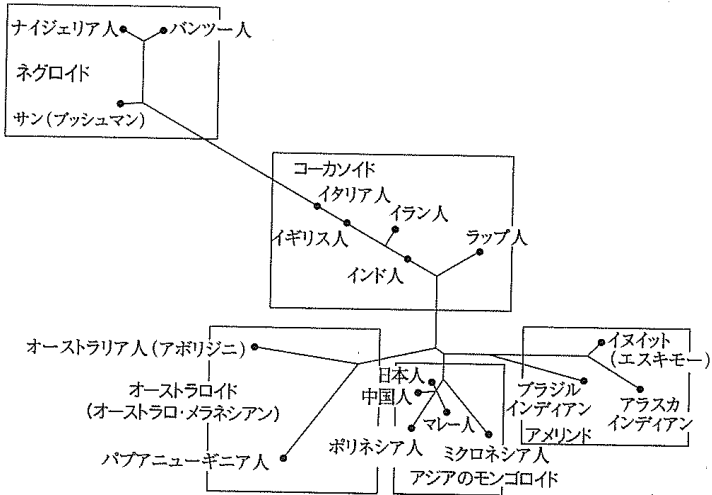
イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo



古い時代（4000年近く前）にラピタ人が広がったと考えられる範囲

遺伝学の成果から推し量れるのは⁵⁵、民族集団の間の遺伝的な近縁関係が、地理的分布や形態的特徴に基づいた人間集団の分類とかなりの程度、一致していることである。すなわち具体的には、アフリカ（サハラ砂漠以南）のアフリカ人、ヨーロッパからインドにかけて分布する西ユーラシア人、インド以東のアジア・ポリネシアに分布する東ユーラシア人、かつてのサフル大陸（オーストラリア・ニューギニア）に分布するサフル人、南北アメリカ人が次のような系統樹で示することができる⁵⁶。

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo



確かに、ヒトとしての形態から見れば、サフル人・南北アメリカ人・東ユーラシア人は異なっているけれども、遺伝子からすると、これらは一まとまりと考えることができるという⁵⁷。このように、世界の主な民族集団について遺伝学の情報を元に遺伝的な近縁関係が推定される⁵⁸。なお、この図表で、集団と集団をつなぐ線の長さは遺伝距離に比例している⁵⁹。

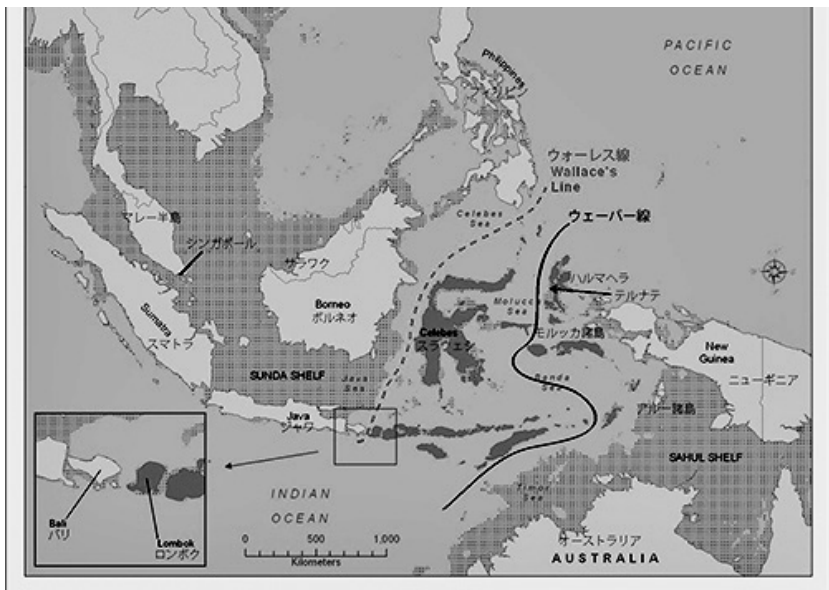
5.

オーストラリア先住民の世界では、どこでも、適切な土地の言語を話すことがパスポートであり、土地の人や精霊に、自分が親しい知己でありそこにいる権利があることを示すのである⁶⁰。

生物地理学的な区分で「ウォーレシア Wallacea」と呼ばれる地域がある

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

(ウォーレスの名は、19世紀イギリス人の生物学者・探検家アルフレッド・ラッセル・ウォーレスに基づいて名付けられた)。具体的には、インドネシアの島々のことで、スマトラ島・ジャワ島・バリ島・ボルネオ島より東側に位置し、ニューギニアやティモール島の西側にある地域である(境界域では、バリ島がアジアの端で、隣接のロンボク島からオーストラリア系となる)。すなわち、ウォーレス線によって縁どられた東側に広がる海と島の世界のことである⁶¹。



歴史的には、深い海峡によってアジアともオーストラリア大陸とも隔てられていて、大陸とつながったことが一度もなかった島々で、オーストラリア区とはウォーレス線を境に生物相が異なっている。次の地図において、ウォーレス線の右下がオーストラリア区(左上が東洋区)である⁶²。

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo



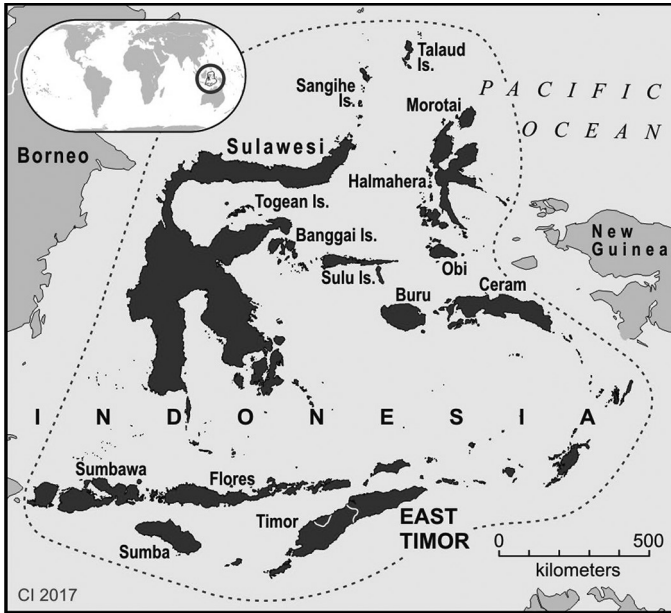
歴史を遡れば、過去の地形史でいう更新新世代の氷河期において、海面が100~150m低下し、西側に「スンダランド」と呼ばれる陸続きの帯が出現し（東南アジアのマレー半島からスマトラ島・ジャワ島・ボルネオ島・バリ島までの地帯）、および、東側のオセアニアに「サフルランド」（現在のニューギニア島ならびにオーストラリア大陸・タスマニア島に相当）が形成された。これら「スンダランド」と「サフルランド」は陸として繋がることはなかったため、生物相が異なる状態が今日まで続いている（スラウェシ島とモルッカ諸島は大部分が熱帯雨林で、小スンダ列島の多くの地域は熱帯雨林は標高が高く風雨の影響を受けている場所で見ついている。その主要な地域はユーカリの森を持つサバンナ森林地帯である）。いわばウォーレシア海域とは、（東南）アジアとオセアニア⁶³の境界に位置する、島々からなる海の空間と言えよう⁶⁴。

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo



ヒトの広がりに関して俯瞰的に見てみて民族的な分布について言えば、マレー系の人種から南東方向に進むにつれアボリジニ系の人種も見られるようになる。今日オーストラリアに住むアボリジニや⁶⁵、ニューギニア島民の祖先に当たるオーストラロ・メラネシア系の人々は5万年前までに現在の土地に到達していたと考えられる⁶⁶。近年、フィリピン（ロソン島北部）の洞窟遺跡では、約6万7千年前に遡る人骨のかけらが出土したという報告もある。遅くとも5万年～4万5千年前までに、スンダ大陸の東部からヒトの移住が行われていたであろう⁶⁷。いずれにしても、スンダランドからサフルランドにかけて実に多くの民族が拡散した状態であり、そのため言語も多種多様になったわけである⁶⁸。

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo



(ウォーレシアを経る形で) スンダランドからサフルランドへ人々がどのような経路を辿って海を渡ったかは興味深い問題である。西から東へと移り住み中で、どの島からどの島へのルートを通ったか、また、何時どの島に定住し始めたのか等、たくさんの考古学的課題が付随的に現われてくる。いずれにしても、遺跡の位置から想定される主なルートとしては、北ルート（北マルク諸島経由）、および、南ルート（東ティモール経由）の2つであろうとされている。現在、確認されている、3万年前以前にまで遡る遺跡の数はウォーレシアにおいてかなり限られており、断定的なことは言えないものの、北の経路というのは、ボルネオ島（以前はスンダランドの一部であった）からマカッサル海峡を経てスラウェシ島を越え中スラウェシの東端を通り、その東に連なる島々を経由してニューギニア島の西端に至るというルートである。もう1つの経路は、ジャワ島（ボルネオ島と同じく、かつてスンダランドの一部であった）からバ

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

リ島・ロンボク島・フローレス島などのスンダ列島を経て、その最東端にあるティモール島からオーストラリアへと入るルートである（ティモールからサフルランド沿岸までの渡海距離は約 150km 近くもある）⁶⁹。

言語の面から見て、アジア系新石器集団に由来するオーストロネシア語群、および、サフル系集団に由来すると考えられるパプア諸語、の両方が分布する遷移帯となっているのが北マルク諸島からニューギニア島西部周辺の島嶼域である⁷⁰。ラピタ集団やその文化が実際に複数の民族が混淆した混合集団であったとすると、こうした混合が起こった可能性がある場所として候補になるのがこのあたりの地域（北マルク諸島からニューギニア島西部周辺の島嶼域）である⁷¹。

6.

太平洋に人間が移った歴史には2つの波があったと言われている⁷²。1つは、今から 35,000~50,000 年ぐらい前の非常に古いもので、インドネシアからジャワ付近を通して、ニューギニアを経由してオーストラリア・タスマニアに至った人の移動である。その当時は氷河期があり、海面は今より 60m ほど低かったとされ、オーストラリアとタスマニアは陸続きで、オーストラリアとニューギニアの間も浅瀬であった。オーストラリアの先住民（アボリジニ）、あるいは、ニューギニアのハイランドに残っている先住民の祖先は、その頃やって来た人たちと言える⁷³。

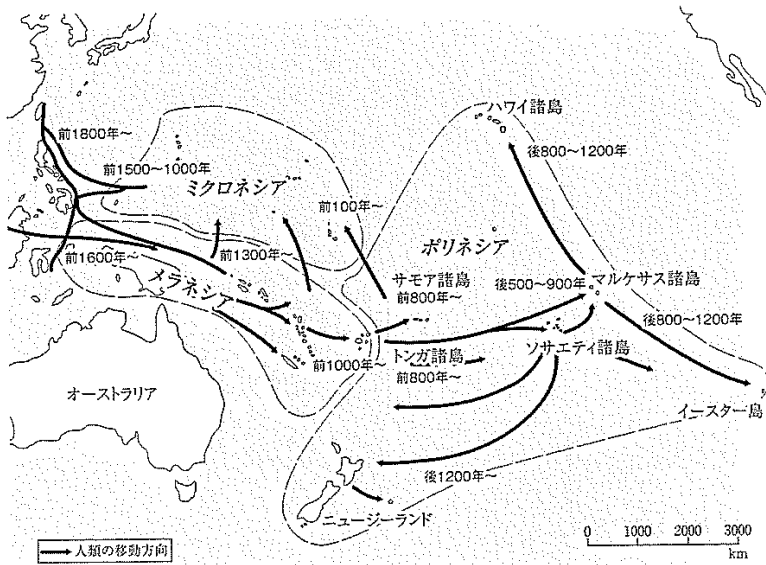
オーストロネシア人という、ポリネシア人の遠い祖先に当たる人たちは、これとは別の第2のグループに属し、およそ 5000 年前に中国大陸から出立し、もともと東南アジアの島々を舟で行き来していた人々である。その後、ニューギニアの北方のビスマルク諸島のあたりから、ラピタ土器や黒曜石を交易品としてもち、東の方向へ勢いよく移動を始めた。最終的には、今から約 3000 年前くらいにフィジー・トンガ・サモアに到着したとされている。このオーストロネシア人（オーストロネシア語の話者）が、アフリカ東海岸の沖合にあるマダガスカルから、インドネシア・台湾・ハワイ・ニュージーランド・イースター

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

島までの（ニューギニアを除く）広大な地域に及んでいる⁷⁴。

こうしたオーストロネシア人の拡散により、神話や伝説がポリネシア各地に伝承されている（例：ハワイキ神話）。共通の祖先をもつポリネシア人の神話は当然よく似ている。例えば、島を釣り上げ、早く動きすぎる太陽を掴まえて現在の速度にしたマウイという神（半神半人）が人気である。マオリの伝承では、マウイは全身、入れ墨をしていたとされている。

伝説によると、ハワイ人の祖先はタヒチから来たと言われている。タヒチ人に、祖先はどこから来たかを問うと、ハワイキからと答える。つまり、ポリネシア人全般はハワイキという祖先の国から来たということになっている（神話などで顕著である）。すなわち、考古学が、ビスマルク諸島方面からソロモン諸島・バヌアツ経由でサモア・トンガに到着した人々が1000年間くらい当地に留まったと言っているのは信憑性が高く、ポリネシア人は自分たちの故郷がサモア・トンガ



小野 (2018:173) リモート・オセアニアにおいて推測される人類移住のルートと移住時代⁷⁵

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

周辺であると考え、この地をハワイキ（祖先の土地）と呼んでいるわけである。この後、サモア・トンガあたりから更に、マルケサス・タヒチを経て、ハワイ・イースター島・ラバ・ニュージーランドへと広がっていったのである。ポリネシアの東部域における広がり の 起 点 は マルケサス と 考 え ら れ⁷⁶、マルケサスから北へ進んでハワイへ、南へ進んでイースター島に達したと想定される。ハワイの場合、この移動と併せて、時代を経て後代の移住もあったであろうと言われている⁷⁷。

以下、印欧語族が占めたユーラシア大陸と事情が異なる海洋地域、言語学的に見れば、大語族の周縁にある周辺地域の言語圏に目を向けてみよう。とりわけ異種の言語が並存している状態が観察される、典型的なケースを採り上げてみたい。一般に、言語ごとの話者数が少なく、また通常、有力言語が存在しないことが特徴であるのが太平洋地域である。そのため、次のように、パプア語を基層にしなが ら オーストロネシア語が上層に入っているケースが少なからず見られる⁷⁸。パプア諸語・オーストロネシア諸語が相互に与え合った影響を解きほぐすことは不可能である。パプア諸語は人類学・考古学の観点からも古い言語とみなされ、パプア・ニューギニア中央部の諸言語はおよそ 50,000BP と考えられている（BP とは時の表示として時々、用いられる記号で、before present の意。1950 年を基点とする。例：1000BP は西暦 950 年のこと）。一方、オーストロネシア諸語は今から 6,000 年くらい前に台湾・中国南部から南方へ渡り⁷⁹、その後、徐々にメラネシア・ポリネシア・ミクロネシアに拡散したと想定されている。

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo



インドネシア言語地図

人々は近隣の言語が話せるか理解できるといった複数言語を使用する状態にあり、このような状況が歴史的にも長く続いたと推定される。この結果、太平洋地域において言語の多様化が進行したと考えられるが、各言語間の相違が大きいという事実の背景にはある文化的要因がはたらいているのである。すなわち、各集団が言語的差異を際立たせることによって内集団と外集団とを区別するという原理である⁸⁰。

さて、書記言語としての歴史を有するのは、7～8世紀以降に、南インド系パラバ文字による碑文を残したジャワ語・マレー語のみで、メラネシア・ポリネシア諸語に文字の伝承は全く見られない⁸¹。イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo は未だ解読に成功していないのが現況である⁸²。口伝による伝承では、ロンゴロンゴを読み書きすることができるのは少数のエリート層のみで、ロンゴロンゴの文字板は神聖なものであると言われている⁸³。なお、ロンゴロンゴの本来の呼称は Kohau motu mo rongorongo 「詠唱のために彫られた線」であり、これが略されてロンゴロンゴ Rongorongo と呼ばれている⁸⁴。

7.

ポリネシアに書記言語（いわゆる文字）はないとされているが、その代替と言わないまでも、場合によっては文字の萌芽とも考えられる表現法としてペトログリフ（petroglyph）がポリネシア全域に見出されている。確かに、今のと

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

ころ、象形文字的なものなのか、絵文字にすぎないのかといった文字性に関する議論はまだ決着していない⁸⁵。文字をもたなかったと言われるポリネシアの人々にとって、ペトログリフとは、文字なのか絵画なのか、あるいは、そもそも意味をもっていたのか等、この問題は古くから言語学・考古学・歴史学の課題とされてきた⁸⁶。

ペトログリフのモチーフとしては人・動物・魚などが共通していて、これらは宗教的・伝説的なものを物語るものと想定される⁸⁷。確かにポリネシアの中でもイースター島では種々のペトログリフが見つかった（例えば家屋の石壁やモアイ像などにおいて）はいるが、かといってイースター島のペトログリフがオリジナルで個性的なものとは言えない。次の例はハワイで見つかったペトログリフであり⁸⁸、ここでも人々の風俗習慣が素朴に描かれていることがわかる⁸⁹。



ペトログリフのうち人体を表わすものでも、原初的には線だけで描かれていたのに次第に逆三角形の胴体が現われたりする。その後、腕・脚の筋肉が描き表される段階に至るという経年的な変化が見て取れる。いずれにしても、一種のシンボリズムであり、高度に様式化、形式化されたものである。

例えばイースター島では「鳥」が、タヒチでは「亀」が、ハワイでは「人」

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

が描かれることが多い等、ポリネシアの中でもそれぞれの島によって表現のしかたが異なっている。ただ、ポリネシアで見つかるのは共通して、たとえ象徴的ではあっても、何かしらの意味を表わすものではないということである⁹⁰。

8.



イースター島⁹¹で、ラバ・ヌイ語と推測される言語で書かれたと考えられている文字列ロンゴロンゴ (Rongorongo)⁹²

ロンゴロンゴ (rongorongo) とは、19 世紀にイースター島で発見された記号列のことで、未だに解読されていない⁹³。一種のペトログリフと考えられ、岩石や洞窟内部の壁面などに文字めいたものが刻まれた彫刻のことである (ギリシア語のペトロ petro「岩」+グリフ glyph「彫刻」が合成された造語)。日本語では、線刻 (画・文字) と呼ばれる。人類が後世に伝えたいさまざまな意匠を岩石などに刻んだものとしては、他にペトログラフ (petro「岩」-graph「書記体」:「(岩に彫られた) 文字・記号」) があるが、これと実際にペトログリフとを区別することは必ずしも容易ではない。一般にペトログラフ (petro-graph) は、描かれたそのものがある意味をもっているという場合に用いられる術語である (例: エジプトや中国の象形文字)⁹⁴。一方、ペトログリフ (petro-glyph) は、基本的に歴史時代以前に描かれたロック・アート「岩絵」と考えてよい。これまで世界中で調査されたペトログリフを分析した結果、広い範囲で普遍的な共

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

通性があることが判明しており、記号・模様として頻繁に見出されるものとして、人、車輪、梯子などが挙げられる。天文学で使う記号のようなコミュニケーションの形式であるのではないかと想定される。

次の例のようなロンゴロンゴは、ポリネシアの中でもイースター島において、家屋の石壁やモアイ像などの表面に実際に多く見受けられる。



テキストは倒立牛耕式 (inverse boustrophedon) と呼ばれる文字の配列形態をとっている。具体的には、左下から始まり、「1」の行を左から右に読み、右端にまで来ると、文字板を180度回転させ、「2」の行をまた左から右に読む。

さて、ペトログラフ (petrograph) は石・岩面に書かれた筆写のことであり、もしかすると文字・テキストの先駆けである可能性もある。場合によっては文字の誕生を探る上で何か手がかりになり得るものとして注目されている⁹⁵。確かに、ポリネシアの中でロンゴロンゴだけが (ペトログラフとして) いわゆる文字のように個々の記号が何かしらの意味をもつのではないかと考えられがちではあるのだが⁹⁶、ただ現実問題としては、ヨーロッパとの接触 (1722年) 以降、島の人々が西欧人から筆記という方法を真似ただけにすぎないとする見

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

方が妥当なのかもしれない⁹⁷。このロンゴロンゴは、イースター島が発見された時（オランダ人ロッヘフェーン）⁹⁸からしばらくしてイースター島に立ち寄ったクックの時代までの実に短い期間に発案・創作とみなすのが現実的な捉え方であると言っているであろう⁹⁹。もともと文字をもたなかった島民は口承で知識を語り継いでいたと想定される¹⁰⁰。結局のところ、文化の伝播（trans-cultural diffusion）¹⁰¹という作用によって文字という概念が伝えられ、これにより島の人々が独自の文字体系を生み出す契機になったというように考えられよう¹⁰²。すなわち具体的には、ロッヘフェーンや仲間たちがお互い紙か何かにメッセージを書いてやり取りしている様を見て、イースター島の人々もこれを真似して似たようなものを作ったのではないかと考えられる¹⁰³。

ペトログリフに見られる人間型や動物型の図形にはロンゴロンゴと同じものがあることは興味深い。ただ、顕著に似ているものは、単独で描かれている場合がほとんどであり、テキストのような複数の絵文字群として現われることは稀である。ロンゴロンゴがペトログリフの図形をヒントにした可能性は十分、考えられ得るが、ロンゴロンゴの歴史はペトログリフの伝統ほど古くないということであろう。

9.

1864年12月、フランス人宣教師であるウジェーヌ・エイロー（Eugene Eyraud）が何百枚もの象形文字が書かれた文字板（タブレット、木版）の存在に言及している。ただ、その折、併せて、島の住民たちはこれらの文字板をぞんざいに扱っていることから、彼らはもはやその意味を知ろうともせず、習慣的に保存しているにすぎないとも述べている。

1958年にはドイツの民族学者トーマス・バルテル（Thomas Barthel）が著書 *Grundlagen zur Entzifferung der Osterinselschrift*「イースター島の文字解読の基礎」

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

でロンゴロンゴ文字の完全なコーパスと文字の一覧を作成している¹⁰⁴。Barthel (1958) は、ロンゴロンゴのほぼ完全な収集で、唯一、公刊されているものである¹⁰⁵。このバルテルの方法はロンゴロンゴ文字を整理するために提案された分類として評価が高く、今日までこの領域の基礎文献とみなされている。




ロンゴロンゴの資料としては、木材に刻まれた 26 点のテキストが残されている¹⁰⁶。バルテルは、各々の文字板にアルファベット 1 文字を付して識別し、文字板の表面を r (recto の略) で、また裏面を v (verso の略) で区別した¹⁰⁷。

バルテルによる 符号 ¹⁰⁸	所蔵場所	特徴
A	ローマ イエズス・マリアの聖心会 修道院	1825 文字。長さ 91cm の櫛（オール）の先端部。
B		1135 文字。長さ 41cm の板。
C		1000 文字。長さ 29cm の板。暦に関する内容。
D	パペーテ	270 文字。長さ 30cm の板。表と裏で筆跡が異なる。
E	ルーヴェン	822 文字。長さ 39cm の板。第一次世界大戦で喪失。鋳型が現存。
F	ニューヨーク	51 文字。長さ 12cm の板。
G	サンティアゴ チリ国立自然史博物館	720 文字。長さ 32cm の板。
H		1580 文字。長さ 44cm の板。
I		2920 文字（最長）。首長の杖。句読点らしきものを使用。
J	ロンドン	2 文字。長さ 73cm の胸飾り。
K		163 文字。長さ 22cm の板。
L		44 文字。長さ 41cm の胸飾り。
M	ウィーン	54 文字。長さ 28cm の板。
N	ウィーン民族学博物館	172 文字。長さ 26cm の板。
O	ベルリン 民族学博物館	90 文字。長さ 103cm の流木。
P	サンクトペテルブルク ピョートル大帝人類学・民族学博物館	1163 文字。長さ 63cm の櫛（オール）の先端部。
Q		718 文字。長さ 44cm の幹。

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

R	ワシントン	357 文字。長さ 24cmの板。
S		600 文字。長さ 63cmの板。
T	ホノルル	120 文字。長さ 31cmの板。
U		27 文字。長さ 70cmの板。
V		22 文字。長さ 72cmの櫂（オール）の先端部。
W		8 文字。長さ 7cmの板。
X		ニューヨーク
Y	パリ	85 文字。長さ 7cmの板。
Z	サンティアゴ チリ国立自然史博物館	長さ 11cmの木片（流木）。牛耕式で刻まれている。

26のテキストには、それぞれ2から2,320の単独の絵文字と、15,000以上の合字の絵文字が刻まれている。

テキストそれぞれには「単独の絵文字」と「合字の絵文字」が刻まれている。「合字」の例としては、例えば、絵文字  の内部に、別の絵文字  が組み合わされた  などが挙げられる。

文字はすべて高さが1cmほどに揃えられており、生物の輪郭や幾何学模様など形状は規格化されている。ロンゴロンゴの書記たちは、口伝の伝承によれば、文字を木板に刻むのに黒曜石かサメの歯を用いたという。

註

- 1 例えばロシアの言語学者ポリワノフは、日本語は起源的にオーストロネシア語族とアルタイ諸語との混合物（アマルガム）であると主張した。
- 2 オーストロネシア語族に関する比較言語学は、ドイツのオットー・デンブヴォルフによってその基礎が確立された（1938年）。これにより、古代日本語と南島諸語の比較を行う前提条件が整い、音体系や語彙に関する類似が指摘されるようになった。
- 3 泉井は、再構された南島祖語と上代日本語の比較を初めて組織的に行った。泉井は約50語を取り上げて音韻対応則を検討したが、南島語と日本語の系統的な関係については懐疑的であった。
- 4 石森・丹羽（2019:19）：「そ（オーストロネシア語族）の一部が何度かの波になって日本列島にも渡来したというストーリーが考えられる」。
- 5 石森・丹羽（2019:23-24）
- 6 埴輪（1990, 1993）によると、縄文人は南方系古モンゴロイドであり、弥生人は北方系新モンゴロイドであるという。古くから日本列島各地で、縄文人・弥生人の化石人骨が発掘されている。いずれもモンゴロイドであり、現代日本人につらなる祖先であるとされる。
- 7 小野（2018:208）：「日本の歴史や日本人の成り立ちを考える上でも、海や島の視点から読み直す作業は新しい発見をもたらしてくれるだろう」。
- 8 宗教的な指導者（聖王、女性側）と政治的な指導者（俗王、男性側）という二重支配構造のこと。邪馬台国の卑弥呼を彷彿とさせる。
- 9 後藤（2003:236-237）。後藤（2003:236）：「オーストロネシア語系海人は、男性が外交的で外洋漁労を行い、女性が内向的で農耕や珊瑚礁漁労を行う傾向がある」。
- 10 後藤（2003:14）：「クッター一行は、広く南太平洋の島々に、きわめて均質な人々、ポリネシア人が住んでいることに驚いた」。
- 11 バック（1966:305-306）
- 12 オーストロネシア語の分布のうち西の端はマダガスカルまで広がっている。例えばワイキキのワイ「水」という語もマダガスカルでも見られる。マダガスカルも人種的にはアジア系である。なお、言語の分布と一致するのがアウトリ

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

- ガー・カヌー（丸太船の安定性を増すため船体の側部<片側もしくは両側>に言わば大きな浮きを付けた形のカヌー）の分布である。
- 13 オーストロネシア語族の原郷はアジア大陸南部（現中国の雲南省あたり）であったろうと考えられ、紀元前1万年頃にはその一派がすでに台湾に渡っていた。その後何千年間にもわたって、台湾から押し出された民族が現在の地域に広がったと想定される。後藤（2003:78-79）：「オーストロネシア祖語には（亜）熱帯性の作物や植物に関する語彙が数多く存在しているので、その源境は赤道周辺の（亜）熱帯地域であると考えられる」。この論点に関係すると想定されるのが「松」・「地震」・「冬」・「北風」等であるという。
 - 14 マラガシー民主共和国。
 - 15 オーストラリア先住民の言語（アボリジニ）はこの語族に属さないが、これはオーストロネシア語族が移動して来る以前の先住民族の言語である。
 - 16 台湾の高山族諸語は（1）に属する。
 - 17 台湾の言語。
 - 18 特に接中辞は全く見られない。
 - 19 （1）のタガログ語も後者の語順が普通である。なお、（2）の中にはSOVとなるものがあり、例えばニューギニア島（パプア州）のトバティ語では「私は水をもう飲んだ」を neg（私） naan（水） ninj（すでに） ung（飲む）と言うが、このような語順は先住民族の言語（パプア諸語）の影響を受けてできたものと考えられる。
 - 20 後藤（2003:162）
 - 21 北はハワイ、東はイースター島、南はニュージーランドの広がりを「ポリネシア・トライアングル」と呼ぶ。
 - 22 1976年にホクレア号（ハワイで復元されたダブルカヌー）がタヒチ・ハワイ間（4000km）の実験的航海（約1カ月）に成功した。
 - 23 ただ、平和な島国というイメージだけでなく、かつては激しい武力衝突が行われていた地域でもある。
 - 24 紀元後1000年前後にニュージーランドに辿り着いたポリネシア人がマオリの祖となった。
 - 25 Blust（1988）
 - 26 アボリジニの文化的背景に入っていこう（青山2001:97, 119-120）。アボリジニ

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

の世界観（霊性・神話体系・法概念）を最も集約した形で表現した概念は大地（カントリー）であり、これは一般には「ドリーミング」dreaming と呼ばれている（ローズ 2003:59-60, 65-70）。大地は、あらゆる生命の起源とうみなされている。例えば日本神話だと、神話で語られている物語は以前に起こった何かしらの事実を反映していると捉えられることが多いけれども、このドリーミングというのは、大昔に起こったのではあるが過去に終えられたことではなく現在もなお続いて起こっているという考え方である。まず初めに大地があり、そこにドリーミングたち（祖先神）が立ち現われ、地形をかたちづくり、各種の存在者を創造したのである（保莉 2004:62-3）。すべては大地からやってくるとされ、あらゆる存在が大地によって生み出され、大地によって維持されていると考えられる。ローズ（2003:29）のこぼを借りれば、「大地は生命を維持するための『巨大なバッテリー』である。このバッテリーは、アボリジニの人々が儀式を執り行なうことで、生命力を充電することができる」。保莉（2004:63）によれば、この「大地（カントリー）」は、「ドリーミング」・「法」・「正しい道」・「歴史」と相互に交換可能な用語であるという。さらに言えば「正しい道、あるいは倫理という語に、物質的か形而上的かの分離がなされていない点は決定的に重要である。[...] 大地・ドリーミング・法という三つの概念が相互に交換可能なのは、これらすべてに正しい道という倫理性が溶け込んでいるからにほかならない」（保莉 2004:64）。このようにドリーミングは、特定の時間に縛られない、いつもある存在である。現在を生きている人々にも直接的に影響を与えるものなのである。

大地（カントリー）は、その土地から採れる動植物を人間に提供してくれる場所という単なる空間としての意味だけでない。大地は精神的な拠りどころでもあるのである。ブッシュや岩場も先祖の魂の宿る場所であり、また各部族ごとの聖地があり、そこでは定期的に儀式が行なわれる。保莉（2004:170）によれば、アボリジニ社会のネットワークを通してさまざまな情報が行き交う。オーストラリア北部の牧場地帯では牧閑期である雨期にはアボリジニの労働者は牧場を離れカントリーを巡り（walkabout）、他の牧場などに暮らす周辺の人々とも密接にコンタクトをとる機会がある。こうして、人的ネットワークがオーストラリア大陸中に拡まっていった。

聖地は、創造のエネルギーが宿っている場所であり、アボリジニが創造の時

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

代に立ち戻り、生命の原点に触れる場でもある（青山 2008:28-31）。こうした宗教文化的な背景は、イギリス人をはじめとするヨーロッパ人には理解されず、キリスト教の布教の過程で文化が破壊されていった。自らはドリーミング（祖先神）の法倫理に従い生きる、大地の民族アボリジニは、自分たちとは異質のイギリス人をどう捉えていたのであろうか（青山 2001:195）。アボリジニ自身は大地の法に護られているのに対し、不道德な行為（例：生物を殺す）を繰り返す人々（例：イギリス人）には別の出自・由来があると考えていたのであろう（白人が「猿から生まれた」とする物語があるのは、どうやら進化論の基本的な考え方によってのこのことのような）。いずれにしても、アイデンティティーの喪失にもつながりかねない痛手を受けた先住民族のアボリジニの文化には、私たちがイメージするようないわゆる宗教というものはなく、特定の教祖もいなければ、教会のような建物もない。キリスト教のような唯一絶対の神という存在はなく、人間は自然界のあらゆる種（動植物）と同じ生命を分け合っているという見方をする（青山 2008:28-31）。その土地に生きる自然界の存在すべてと同等に人間が生活する場である。祖霊という一つの魂から生まれたあらゆる生命は互いに等しい存在であり、人間だけが抜きん出ているのではないという世界観である。

- 27 本来は、古代ローマ人から見た中部イタリア先住民を指示していたのだが、英語（aborigines）では意味がより一般化し「原住民一般あるいは土着の動植物」などを指し示すようになった。
- 28 現在の人類学の知見では、700 万年ほど前に猿人が出現した後、50 万年前にアフリカで旧人、同じくアフリカで 20 万年前にホモ・サピエンス（新人）が出現、8～6 万年前にこの新人がアフリカを出て世界各地に広がっていったとされている。
- 29 オーストロネシア語族はオセアニアにおいては新しい民族である（その広がりには、インドネシア・フィリピン・マレー半島を中央に、北は台湾、西はマダガスカル、東はポリネシアのイースターにまで及ぶ）。
- 30 ただし、言語の面で系統的な関係を見出すのは困難である：“Austronesian and Australian languages are quite different in type and there is no hint of common ancestry.”（Yallop 1982:31）
- 31 オーストラリア先住民と同じ遺伝子をもつ人々がアジアに散見されるという報

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

告もある。

- 32 言語の歴史において万年の単位の年代が経過すると、言語相互間の系統関係の解明は伝統的な比較言語学の手法では極めて困難か不可能である（崎山 1993:69）。
- 33 基本的にあくまで比較言語学の手法をとろうとする Dixon（1980）の提唱は正論ではあるが限界があることも確かであろう。
- 345 万年の間、基本的に狩猟採集という形態は変わらなかったことになる。オーストラリアは、農耕の技術・武具（弓矢）・土器のない唯一の大陸である（大林 1999:23）。5 万年前から歴史時代に至るまで狩猟採集生活が継続したという点で、例えば近隣のニューギニアとは異なっている（印東 1993:102）。
- 35 舟・筏による（東南アジアとは数十キロの距離）。
- 36 ネットル&ロメイン（2001: 122-3）：「パプア・ニューギニアは、おそらく、世界でもっとも生物・言語多様性の豊かな国であろう（最近の統計では 860 言語）。パプア諸語（=非オーストロネシア諸語）が人口の集中する高地地方に集まり、オーストロネシア諸語の大部分が海岸沿いに分布しているのは、オーストロネシア諸語の話者たちの到来が歴史的に遅かったことを示していると言える。
- 37 オセアニアは、太平洋（Ocean）を中心に、その島々ならびにオーストラリア大陸を指すが、もともとはギリシア語の *ōkeania* 「地球の周りを取り囲む大河」に由来する（崎山 1999:29）。オセアニアは人類史の中でアメリカ大陸と並んで新しい。考古学の立場から言えば、後期旧石器時代になってはじめて人類が住むようになった地域である。
- 38 崎山（1993:69）。後藤（2003:18）：「オーストロネシア語系統の諸集団は、オーストラリア・アボリジニやパプア人とは比べ物にならないくらい高度は航海技術を持っていた」。
- 39 <http://www.r.minpaku.ac.jp/ritsuko/japanese/essays/languages/austronesian.html>（2021 年 12 月アクセス）
- 40 エヴァンズ Evans（2013:38）
- 41（ニュージーランドを除く）東ポリネシア（西ポリネシア＝サモア・トンガ）の主な島々への移住は紀元 850 年頃までには終わっていたであろうことは考古学的に証明されている。ニュージーランドへの移住は紀元 1000 年頃であったと考えられている。ポリネシア人の伝承では「自分たちの祖先はハワイキと呼ばれ

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

る西の方から朝日に向かって帆を上げてやってきた。そして人が死ぬと、その魂は日の沈む西方へ戻っていく」と伝えられている。東ポリネシアという西方とはサモア・トンガを指している。

- 42 これまで「マライ・ポリネシア語族」ともよく呼ばれてきた。
- 43 家畜・栽培植物を携えての渡海移動であったからこそ、動物・植物資源に乏しいオセアニア島嶼部に住み着くことが可能であったのだと言われている。
- 44 ベルウッド Bellwood (2008:iii) :「ポリネシア人が広範囲に分布するという事実は実際にはオーストロネシア語族の拡散という驚くべき現象の単なる一部分にすぎない」。
- 45 1952年ニューカレドニアで発見された土器が「ラピタ土器」と命名されたことから、この文化がラピタ文化と呼ばれるようになった。ポリネシア文化の源流とする考え方が有力である。
- 46 ラピタ人は、人類史上初めて遠洋航海を実践し太平洋の島々に住み着いたと考えられる民族で、言語的には、オーストロネシア語族（日本語：「南島語族」）の元となったオセアニア祖語（Proto-Oceanic）に近いであろうと想定されている。祖先は（オーストロネシア語を話す）モンゴロイド系の民族であり、元々は台湾にいて、その一部が紀元前 2500 年頃に南下を開始した。フィリピンを経て紀元前 2000 年頃にインドネシアのスラウェシ島・ニューギニア島・メラネシアに到達し、ここでオーストラロイドのパプア先住民と混血し、ラピタ人の始祖となった（紀元前 1100 年頃までに、西ポリネシアのサモア・トンガ海域に到達していた）。現在、タヒチ人やハワイ人、ニュージーランドのマオリ族、イースター島でモアイ像を作ったとされる人々と共に太平洋全域へと広まった言語・習慣・文化はラピタ人から受け継がれたものである。



イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

イースター島の象徴モアイ像。ラビタ人が祖先の姿を描いて作り始めたと言われている。現在、イースター島には森林がほとんどない。原因として考えられるのは、人口の増加（5世紀頃ポリネシアのマーケサス諸島などから多くの人々が移住し森林を切り開き農地を開拓していった）、あるいは、その後のモアイの制作（島のあちこちに巨大な石像を運ぶレールとロープを作るため多くの木材が使用された）等だと言われている。

- 47 オーストロネシア語族についても、過去の言語の再構形に依拠しながら、考古学的に先史文化を再編成し、故地や民族移動を推定しようとする試みが盛んに行なわれている。
- 48 崎山（1993:67）・大林（1999:21）
- 49 オーストロネシア語族（基本的にモンゴロイド系）が渡来するはるか以前の数万年前に移住していたオーストラロイド（オーストラロ・メラネシアン）とされる先住民族との間で、言語的・文化的に激しい混交が行なわれた。その痕跡は特にメラネシアにおける言語の構造的多様性のなつて現われている（崎山1993:67）。
- 50 農耕文化圏が拡大することになった。
- 51 原ポリネシア語は、今から3000年前ころ、フィジーからトンガを経由してサモアに至ったオーストロネシア語族の一派によって形成された。彼らは、メラネシア人・パプア人となった民族より約1000年遅れて、すでに先住民のいたメラネシアを通過し、無人島であったポリネシアに達したのである（崎山1993:69）。14・15世紀には遠洋航海を終えポリネシアの各島々は孤立化しそれぞれ特徴的な文化を築いていた（ヨーロッパ人が渡来するのは16・17世紀のことである）。後藤（2003:159）：「長い移住の歴史の結果、とくにリモート・オセアニアへの航海のために、ポリネシア人にはアジア人とは似ても似つかぬ部分も少なくない。航海は環境条件も大きく変え、認知体系にも大きく影響した」。
- 52 後藤（2003:47）：「今から10万年ごろには、ヨーロッパやアフリカの人類とはやや異なった人類がすでにアジアにはいた。この基礎からモンゴロイドが生み出された」。
- 53 メラネシア語派は多くの点でポリネシ 2003:47 ア語派と言語的特徴を異にしている。インドネシア語がパプア諸語と接触し混合して（ピジン化を受けて）メ

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

ラネシア語派が形成されたとする説が有力である。なお、仮面舞踏・秘密結社がメラネシア文化の特徴である。

54 大林 (1999:21)

55 齊藤 (1993:149-152)

56 片山 (2002:36)

57 齊藤 (1993:152)

58 片山 (2002:34-38)

59 小野 (2018:196) : 「海域東南アジアや南太平洋の島嶼域で広く話されている言語は、ニューギニアを起源とするバプア系語を除けば、オーストロネシア語群という言語群に属している。そして言語学的に、この言語群が人類の移住とともに拡散したのが約 5000 ~ 4000 年前とされており、これは [...] 新石器時代期の開始時期とほぼ一致する。[...] そのオーストロネシア諸語の中に、栽培種や農耕に関する語彙も認められることが指摘され、この言語の利用者が農耕民でもあった可能性が指摘されてきた。東南アジアやオセアニア海域へのオーストロネシア諸語の拡散は、その人口的な規模は限られていたにせよ、南中国や台湾辺りを起源とする農耕民の移住・拡散が最初の契機となったとする仮説は無視できない」。

60 エヴァンズ Evans (2013:22)

61 小野 (2018:111) : 「ラピタ人が東アジア周辺を起源としたアジア系集団を母体にし、その移住の過程でウォーレシア海域を経由している可能性が極めて高い」。

62 Blust (1988) は、オーストロネシア語族の最も古い祖語がもともと台湾あたりにあり、それが南方に拡がってフィリピンあたりでオセアニア系とインドネシア系とに二分されたという仮説を提出している。

63 片山 (1996:91) : 「人口は非常に小さいが、その一方で、オセアニアの民族相は複雑きわまりない。身体特徴を異にする多様な人間集団が割拠する」。

64 小野 (2018:67)

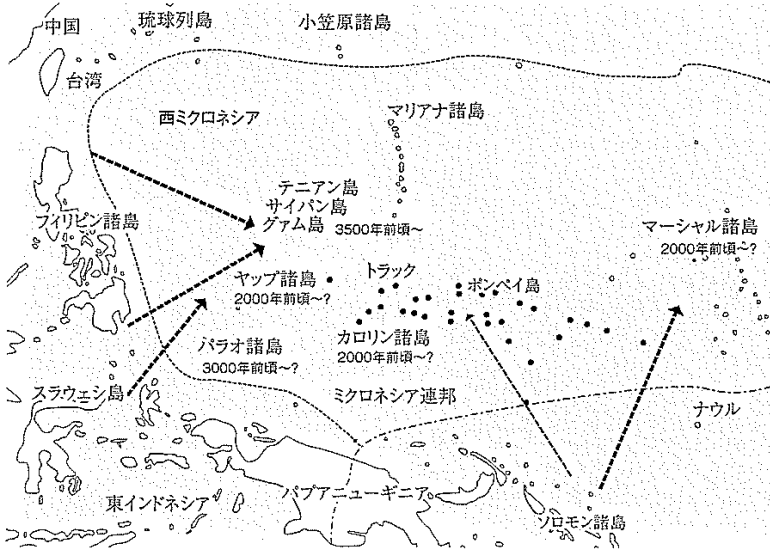
65 大角 (2018:9) : 「ニューギニアのハイランドの言語とオーストラリア・アボリジニの言語の間に共通点があり先史時代につながりあったことを示しているという説を唱える言語学者もいる」。

66 大角 (2018:8-9) : 「(氷河期には陸続きサフル大陸と呼ばれていたニューギニア島とオーストラリアという) この二つの地域は古くから人類が住んでいたこ

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

ともあり、1000以上の言語があり世界で最も言語が密集している地域の一つだ。特にニューギニア島近辺にはパプア諸語といわれる何十もの語族と、系統不明のたくさんの言語が存在しているが、その多くははまだ記述されていない」。

- 67 小野 (2018:72-74)
- 68 小野 (2018:172) : 「南太平洋における人類史で特異なのは、考古学的な金属器時代が存在しないことである」。
- 69 小野 (2018:172) : 「ミクロネシアとポリネシアの島々で、人類による活発な移住が始まったのは、約 2000 年前以降と考えられている。つまり、ウォーレスア海域を含む東南アジア島嶼部で金属器時代が開始され、海上ネットワークが発達した頃とほぼ同時期ということになる」。
- 70 後藤 (2003:221) : 「オーストロネシア語の話者は [...] もともと混成的な集団であった。言語と同様、文化も混成であった。農耕と漁労、そして航海技術の結合。オーストロネシア文化はこのような知識集約型の、そしてたゆまねイノベーションの文化として誕生した [...] そして交易の利を知ったオーストロネシア集団は、さらに新天地を開拓すべく南下を開始した」。
- 71 小野 (2018:126)。小野 (2018:130) : 「初期のオーストロネシア祖語の段階で、イネヤコメ、アワ、キビ、ビンロウ、ヤム等の栽培植物を指す語彙が含まれていた」。
- 72 ディズニー映画『モアナと伝説の海』は、一度、航海をやめたポリネシア人が再び航海を始めたという歴史をベースにしている。物語はサモアやトンガ付近をモデルにしており、このあたりこそポリネシア神話における源境の地ハワイキ (ハワイの語源) に相当する。
- 73 後藤 (1997:35) : 「ポリネシアが東に移動したのは、生命と希望の源である日の出の方向を目指したからだ」。
- 74 タヒチ語もハワイ語もオーストロネシア語の方言である。なお、アウトリガー・カヌー (カヌーの横に張り出した浮きが付いている) の分布がオーストロネシア語の分布と軌を一にする。



小野 (2018:135) ミクロネシアにおける初期居住遺跡の年代と想定される人類の拡散ルート

76 篠遠・荒俣 (2003:217-218)

77 考古学者の中でも、ANUのBellwood (1984-5, 1994)などは、考古学的裏付けのない空白部分に対して、オーストロネシア語学の成果を積極的に利用しようとしている。特に後者の論文は、オーストロネシア語の比較言語学の研究成果を活用しようとする姿を浮き彫りにしている。

78 もっともイタリア半島のエトルリア語のような運命を辿ることになる場合ばかりではない。

79 山田 (2017: 91-92)

80 崎山 (2002:361)。ベルウッド (1989)によると、ラピタ人こそオセアニアに最初に進出したオーストロネシア語族の集団であり、オセアニアの海洋世界で優勢なオーストロネシア語族のオセアニア系諸語の祖形を最初にそこにもたらしたという。なお、ラピタ人の究極のルーツは台湾あるいは南中国にあったとする。小野 (2018:110)：「アジア系新石器集団＝オーストロネシア集団が台湾を起源とし、東南アジア島嶼部を経由してオセアニアへと拡散したとする移動

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

仮設が現在ではもともと支持されている」。

- 81 少なくとも他の地域でロンゴロンゴに似た文字は見出されない。
- 82 ある特定の文字板が太陰暦と関連するという以外、文字板の内容は全く解明されていない。
- 83 ロンゴロンゴはラバ・ヌイ語（イースター島の言語）を表記するための文字体系ではなく、系図・航海術・天文学・踊りの振付などに関する知識を記憶するための記号にすぎないという見解も広く支持されている（Comrie 1996:100）。
- 84 片山（1991:49）：「十分な民族誌的な記録が世界に紹介される以前に、[...] 先史文化の全容がほとんど崩壊してしまったことも、この島（＝イースター島）が醸し出す神秘性に拍車をかけている」。
- 85 文字性に関する議論として、この文字が備忘のための絵文字（pictograph）にすぎないのか、あるいは、十全の象形文字（iconomatography）であるのか等の諸説がある。Rjabchikov（1987）および Guy（1988）は、ロンゴロンゴが表意文字と表音文字の混合体系であるとしている。
- 86 ペトログリフが多く出土するイースター島はポリネシアの東端である。
- 87 イースターの芸術と、石や木に刻まれて書かれている記号との間の類似性を考察する必要がある。
- 88 池澤（2000:302）：「岩の表面に図を彫ることは世界中のずいぶん広い範囲で行われてきた。[...] ハワイのペトログリフで驚くべきことはその数だ。ポリネシアでは各地でペトログリフを見ることができるが、ハワイほど多く残っているところはない。ハワイ全体では約 135 か所におよそ二万五千点の図像が残っている」。
- 89 池澤（2000:303-304）：「ペトログリフは流れて固まった溶岩の表面や、大きな石、それに岩の断崖などに作られる。[...] ハワイのペトログリフはポリネシアからこの島々に人間がやってきて間もない時期から、白人の文化が大量に流れ込んだ最近まで、ずいぶん長い時期に亘って制作され続けたという。[...] 中にはアルファベットの文字が入っていてキリスト教文明以降とわかるものもあるが、大半は確定の手掛かりもない。言い換えれば時代を超えている。[...] ながく残る素材の上にある意図をもって図を刻み、そこに意味を込めるという行為は、文字の発祥に近いものかもしれない」。
- 90 篠遠・荒俣（1994:158-166）。対照的に、例えば禁煙を示す🚭などの視覚記号はピクトグラム pictogram「絵文字」と呼ばれ何らかの情報を表示する。

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

- 91 イースター島の現地名がラバ・ヌイである。
- 92 ラバ・ヌイ語で「暗誦・詠唱・朗誦」という意味である。
- 93 ロンゴロンゴは現在、世界各地の博物館に分散しており、イースター島に残っているものはない。
- 94 漢字は体系的な表語文字の代表である。
- 95 日本では主に漢字伝来以前のもののことを指す。
- 96 篠遠・荒俣 (2003:181) : 「一つのうた (祈祷) や、あるいは家系をレサイトするときに、シンボルとして思いださせるようなものではなかったか」。
- 97 篠遠・荒俣 (1994:165-166)。現在も解読を進める人々は、ロンゴロンゴを表語性と表意性を備えた象形文字であるとみなしている。
- 98 1722 年のことである。
- 99 発見当初こそラバ・ヌイ文化の古い伝統に属するのではないかと考えられた。放射性炭素年代測定が行われた唯一の文字板 Q (後述のサンクトペテルブルク小文字板) から判明したことは、この文字板の作成は 1680 年以降という事実である。
- 100 1864 年に布教目的で来島していたカトリックの宣教師が言及したその時点まで、ロンゴロンゴの文字板を立証する証拠は見出せていない (初期の探検家たちにロンゴロンゴが目撃されなかったのは、当時ロンゴロンゴが秘匿されていたからかもしれない)。現存する文字板のすべてがヨーロッパ人と接触した後に作成されたものである可能性が高い。
- 101 文化人類学の用語である。
- 102 100 年くらいの間に急速に発展・衰退したことにはなる。
- 103 篠遠・荒俣 (2003:181)
- 104 これは、文字の記号と、それらの組み合わせを参照する際の数字のコードである。
- 105 バルテルは、イースター島にさらに別の 2 つの文字があることに注目している (タウ ta'u 文字とママ mama 文字である)。
- 106 石に刻まれたいくつかのものを除いて、現存するロンゴロンゴのテキストはすべて木材に刻まれたものである。ただし、木材は希少であったため、熟練の書記者のみが木材を用い、見習いはバナナの葉などに文字を記したと言われている。また、バナナの葉は同時に、木材に文字を書く前の下書きのために使用されたいらしい。

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

107 例えば Pr2 は「文字板 P」の表面の 2 行目を指すことになる。

108 文字板 A・P・V はヨーロッパの船の櫂（オール）に文字が刻まれていることから、これらの文字板の作成は 18 / 19 世紀と特定される。

参考文献

- 青山晴美 (2001) 『もっと知りたいアボリジニ アボリジニ学への招待』 明石書店
- 青山晴美 (2008) 『アボリジニで読むオーストラリア』 明石書店
- 赤坂憲雄 (2010) 『増補版 遠野／物語』 荒蝦夷
- 荒木一雄・安井稔 編 (1992) 『現代英文法辞典』 三省堂
- 池澤夏樹 (2000) 『ハワイ紀行』 新潮文庫
- 石橋幸太郎 (1973) 『現代英語学辞典』 成美堂
- 石森大知・丹羽典生 (2019) 『太平洋諸島の歴史を知るために 60 章』 明石書店
- 印東道子 (2017) 『島に住む人類 オセアニアの楽園創世記』 臨川書店
- 泉井久之助 (1953) 「日本語と南島諸語——系譜関係か、寄与の関係か——」 『民族学研究』 17 卷 2 号
- 泉井久之助 (1975) : 『マライ・ポリネシア諸語——比較と系統——』 弘文堂
- 板橋義三 (2001) : 「アルタイ諸言語 (含朝鮮語) と日本語」 『言語研究』 120, p.106-116.
- 岩波講座 (1978) 『日本語 12 日本語の系統と歴史』 岩波書店 岩波書店 (2004) 『フィール
ドワークは楽しい』 岩波書店
- 江上波夫・大野晋 (1973) 『古代日本語の謎』 毎日新聞社
- 大角翠 (2018) 『言語学者のニューカレドニア』 大修館書店
- 大塚高信・中島文雄 (1982) 『新英語学辞典』 研究社
- 大野晋 (1957) 『日本語の起源』 岩波新書
- 大野晋 (1980) 『日本語の系統』 至文堂
- 大野晋 (1981) 『日本語とタミル語』 新潮社
- 大野晋 (1994) 『日本語の起源 新版』 岩波書店
- 大野晋 (1996) 「『タミル語 = 日本語同系説に対する批判』を検証する」 『日本研究』 第 15 集 (国
際日本文化研究センター)
- 大野晋 (2000) 『日本語の形成』 岩波書店
- 大野晋・柴田武 (1978) 『日本語の系統と歴史』 岩波書店
- 荻野蔵平・齋藤治之 (2005) 『ドイツ語史小辞典』 同学社
- 小野林太郎 (2018) 『海の人類史——東南アジア・オセアニア海域の考古学』 (環太平洋
文明叢書) 雄山閣
- 長田俊樹他 (1996) 「日本語 = タミル語同系説を検証する——大野晋『日本語の起源 新版』

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

をめぐって』『日本研究』第13集（国際日本文化研究センター）

長田俊樹（2017）：「はたして言語学者はふがいないのか——日本語系統論の一断面」井上章一（編）『学問をしばるもの』p.10-29.

長田俊樹（2020）：『日本語「起源」論の歴史と展望——日本語の起源はどのように論じられてきたか』三省堂

長田夏樹（1972）『原始日本語研究——日本語系統論への試み』神戸学術出版

小沢重男（1968）『古代日本語とモンゴル語』

小沢重男（1976）『日本語の系統』大修館書店

風間喜代三（1978）『言語学の誕生』岩波新書

片山一道（1991）『ポリネシア人——石器時代の遠洋航海者たち』同朋舎

片山一道 他 編（1996）『人間史をたどる』朝倉書店

片山一道（1996）：「アメリカ大陸とオセアニアへの拡散——モンゴロイド物語——」『人間史をたどる：自然人類学入門』（片山一道 他 編）1996, p.78-99. 朝倉書店

片山一道（2002）『海のモンゴロイド』吉川弘文堂

亀井孝（1963）『日本語の系統』平凡社

亀井孝（1973）『日本語系統のみち』吉川弘文堂

亀井孝・河野六郎・千野栄一（1988-2001）『言語学大辞典』三省堂

川島敦夫（1995）『ドイツ言語学辞典』紀伊國屋書店

川本崇雄（1978）『南から来た日本語』三省堂

金田一京助 他（1951）「日本語の系統について」『国語学』5（金田一京助・松本信廣・泉井久之助・服部四郎・亀井孝・河野六郎）

京極夏彦（2014）『遠野物語拾遺 retold』角川学芸出版

江実（1974）：「ニューギニアの NAN 語について」『言語研究』65, p.84-85.

江実（1978）：「日本語はどこから来たか：北と南から見た日本語」in 大野晋・祖父江孝男（編）『現代のエスプリ 臨時増刊号 日本人の原点1 形質・考古・神話・言語』p.272-304. 至文堂

江実（1980）：「パプア語と日本語との比較研究：基礎語彙による」『日本語の系統』（大野晋 編）1980, p.137-217. 至文堂

小泉保（1987）「日本語系統論の足跡」馬淵和夫『日本語の起源』武蔵野書院 p.2-22.

小泉保（1998）『縄文語の発見』青土社

高津春繁（1954）『印欧語比較文法』岩波全書

高津春繁（1992）『比較言語学入門』岩波書店

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

- 後藤明 (1997) 『ハワイ・南太平洋の神話』 中公新書
- 後藤明 (2003) 『海を渡ったモンゴロイド』 講談社
- 後藤明 (2017) 『世界神話学入門』 講談社現代新書
- 斎藤成也 (1996) : 「ヒトさまごま——遺伝子でたどる地球上の人間模様——」 『人間史をたどる : 自然人類学入門』 (片山一道 他 編) 1996, p.144-155. 朝倉書店
- 崎山理 (1978) 「南方諸語との系統的関係」 in 大野晋 (編) 『岩波講座 日本語 12 日本語の系統と歴史』 p.99-150.
- 崎山理 (1990) 『日本語の形成』 三省堂
- 崎山理 (1990) 「日本語系統論関係著作・論文目録」 村山七郎 『日本語の起源と語源』 三一書房 p.407-456.
- 崎山理・宮岡伯人 (2002) 『消滅の危機に瀕した世界の言語』 明石書店
- 崎山理 (1990) 『日本語「形成」論 日本語史における系統と混合』 三省堂
- 佐佐木隆 (1978) 「日本語の系統論史」 in 大野晋 (編) 『岩波講座 日本語 12 日本語の系統と歴史』 p.301-346.
- 司馬遼太郎 (1973) 『陸奥のみち、肥薩のみち』 街道をゆく 3、朝日新聞出版
- 下宮忠雄 (1992) 『ドイツ語源小辞典』 同友社
- 下宮忠雄 (1999) 『歴史比較言語学入門』 開拓社
- 下宮忠雄・川島敦夫・日置孝次郎編著 (1985, 1994⁴) 『言語学小辞典』 同友社
- 下宮忠雄・金子貞雄・家村睦 (1989) 『スタンダード英語語源辞典』 大修館書店
- 篠遠喜彦・荒俣宏 (1994) 『楽園考古学』 平凡社
- 篠遠喜彦・荒俣宏 (2003) 『南海文明グランドクルーズ——南太平洋は古代史の謎を秘める——』 平凡社
- 庄垣内正弘 (2002) : 「板橋義三『アルタイ諸言語 (含朝鮮語) と日本語』に対するコメント」 『言語研究』 121, p.112-121.
- 鈴木良次 他 編 (2006) 『言語科学の百科辞典』 丸善
- 千田俊太郎 (2020) : 「ババア諸語と日本語の源流」 in 長田俊樹 (編) 『日本語「起源」論の歴史と展望——日本語の起源はどのように論じられてきたか』 p.127-152.
- 寺澤芳雄 (1997) 『英語語源辞典』 研究社
- 寺澤芳雄 (2002) 『英語学用語辞典』 研究社
- 中島平三 (2006) 『言語の辞典』 朝倉書店
- 中村生雄 (1992) 「神と精霊の対立というパラダイム」 in 赤坂憲雄 (編) 『漂泊する眼差し』 p.207-242.

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

- 中本正智 (1992) 『日本語の系譜』 青土社
- 西田龍雄 (1976) 「日本語の系統を求めて——日本語とチベット・ビルマ語」 『月刊言語』 vol.5:6-8.
- 日本言語学会 (1973) シンボウジウム 『日本語の起源』 (泉井久之助・江上波夫・大野晋・大林太良・崎山理・村山七郎)
- 埴原和郎 (1990) 『日本人新起源論』 角川選書
- 埴原和郎 (1993) 『日本人と日本文化の形成』 朝倉書店
- 服部四郎 (1999) 『日本語の系統』 岩波文庫
- 藤原明 (1981) 『日本語はどこから来たか』 講談社
- 平凡社 (1963) 『日本語の歴史』
- 保莉実 (2004) 『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』 御茶の水書房
- 堀井令以知 (1997) 『比較言語学を学ぶ』 世界思想社
- 松浪有 (1983) 『大修館英語学事典』 大修館書店
- 松本克己 (1996) 「日本語の系統」 諏訪春雄・川上湊編 『日本人の出現—胎動期の民族と文化』 雄山閣
- 松本克己 (2000) 「日本語の系統と“ウラル・アルタイ説”」 『日本エドワード・サピア協会研究年報』 14:1-25.
- 松本克己 (2001) 「日本語の系統：回顧と展望」 『言語研究』 第120号
- 松本克己 (2007) 『世界言語のなかの日本語 日本語系統論の新たな地平』 三省堂
- 馬淵和夫 編 (1985) 『日本語の起源』 武蔵野書院
- 宮岡伯人 (1992) 『北の言語：類型と歴史』 三省堂
- 宮岡伯人・崎山理 (2002) 『消滅の危機に瀕した世界の言語』 明石書店
- 村山七郎 (1961) 「国語系統論・比較研究の歴史」 『国語国文学研究史大成』 15 三省堂
- 村山七郎 (1978) 『日本語系統の探求』 大修館書店
- 村山七郎 (1979) 『日本語の誕生』 筑摩書房
- 村山七郎 (1981) 『日本語の起源をめぐる論争』 三一書房
- 村山七郎 (1988) 『日本語の起源と語源』 三一書房
- 村山七郎・大林太良 (1973) 『日本語の起源』 弘文堂
- 矢島文夫 (2013) 『世界の文字大事典』 朝倉書店
- 安井稔 (1996) 『コンサイス英文法辞典』 三省堂
- 安本美典 (1991) 『日本人と日本語の起源』 毎日新聞社

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

- 安本美典 (1994) 「研究史・文献目録 日本語の起源」大野 晋『日本語の起源 新版』岩波書店 p.12-35.
- 安本美典・本多正久 (1978) 『日本語の誕生』大修館書店
- 柳田国男 (1957) 『史料としての伝説』村山書店
- 山田仁史 (2017) 『新・神話学入門』朝倉書店
- 吉田敦彦 (1992) 『昔話の考古学』中公新書
- 吉田和彦 (2005) 『比較言語学の視点』大修館書店
- Althaus, Hans P. · Henne, Helmut · Wiegand, Herbert E. : „*Lexikon der Germanistischen Linguistik*“, Bd. 1,2,3,4, Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1980²
- Bellwood, Peter (1984-85): “A hypothesis for Austronesian origins”, *Asian Perspectives* 26 (1) : 107-117.
- Bellwood, Peter S. (1994) : “An archaeologist’s view of language macrofamily relations,” *Oceanic Linguistics* 33 (2) : 391-406.
- Bellwood, Peter (1978) : *Man’s Conquest of the Pacific*, Auckland and London, 植木武・服部研二 訳『太平洋：東南アジアとオセアニアの歴史』法政大学出版局 1989.
- Blust, R.A. (1988) : ‘The Austronesian homeland: a linguistic perspective,’ *Asian Perspective*, 26:45-67.
- Comrie, Bernard et al. (eds.) (1996) : *The atlas of languages*. New York.
- Dixon, R.M.W. (1997) : *The rise and fall of languages*. Cambridge University Press.
- Guy, Jacque B. (1988) : “Rjabchikov’s Decipherments Examined.” *Journal of the Polynesian Society* 97: 321-323.
- Lehmann, Winfred P. (1992) : *Historical Linguistics*, London & New York
- Lockwood, W.B. (1969) : *Indo-European Philology. historical and comparative*; 永野芳郎 訳：『比較言語学入門』大修館書店 1976.
- Lockwood, W.B. (1972) : *A Panorama of Indo-European Languages*, 岩本忠 訳『インド・ヨーロッパ諸語の展望』三修社 1987
- Meier-Brügger, Michael (2002) : „*Indogermanische Sprachwissenschaft*“, 8. völlig neugearbeitete Auflage der früheren Darstellung von Hans Krahe, de Gruyter, Berlin/New York.
- Meillet, Antoine (1928) : *La méthode comparative en linguistique historique*, 泉井久之助 訳『史的言語学における比較の方法』みすず書房 1979.
- Miller R.A. (1971) : *Japanese and the other Altaic languages*, 西田龍雄 監訳『日本語とアル

イースター島のロンゴロンゴ Rongorongo

- タイ諸語』大修館書店 1981.
- Miller R.A. (1980) : *Origins of the Japanese language*, 村山七郎 他 訳『日本語の起源』筑摩書房 1982.
- Onions, C. T. (1966) : *Oxford Dictionary of English Etymology*, Oxford University Press.
- Pedersen, Holger (1924) : *Sprogvidenskaben i der Nittende Aarhundrede: Meroderog Resutater* : 伊藤只正 訳『言語学史』こびあん書房 1974.
- Price, Glanville (1988) : *Encyclopedia of the Languages of Europe*, 松本克己 監訳『ヨーロッパ言語辞典』2003.
- Rjabchikov, Sergej V. (1987) : “Progress Report on the Decipherment of the Easter Island Writing System.” *Journal of the Polynesian Society* 97: 313-320.
- Rose, D.B. (1996) *Nourishing Terrains : Australian Aboriginal Views of Landscape and Wilderness*. Canberra: Australian Heritage Commission. 保莉実 訳『生命の大地—アボリジニ文化とエコロジー』平凡社 2003.
- Friedrich von Schlegel (1806) : *Über die Sprache und Weisheit der Inder*, 山本定祐 他 訳「インド人の言語と知性について」『ドイツ・ロマン派全集 第12巻 シュレーゲル』国書刊行会 1990
- Schleicher, August (1861) : *Compendium der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen*, Weimar.
- Schmidt, J. (1872) : *Die Verwandtschaftsverhältnisse der indogermanischen Sprachen*, Weimar.
- Szemerényi, Oswald (1990) : *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft*, Darmstadt.
- Tryon, Darrell (2009) : *Oceanic Encounters Exchange, Desire, Violence*, Canberra.
- Wurm Stephen A. (1996) : *Atlas of languages of intercultural communication in the Pacific, Asia, and the Americas*. Trends in Linguistics Documentation 13. Berlin/New York.